



妙高山のササ原

Part 1

「タケは森をつくりササは草原をつくる」ことを巡るあれこれ

支倉千賀子 東京農業大学農学部非常勤講師

3千年ほど前の縄文遺跡からササの籠でつくった籃胎（らんたい）漆器が出土するなど、タケとササは古くから人と関わりの深い植物です。しかし、めったに花を咲かせないタケとササは、見分けが難しいとされてきました。ところが、丁寧に形態から種を分類していくと地域ごとに進化が進み、ラン科同様に極めて多様性の高い植物であることがわかってきています。自然の中でタケは森、ササは草原を優占的につくることから植生保護などのため駆除されることもありますが、タケとササでは侵略的植生駆除と絶滅危惧種保護という相反する問題が生じていることに気づかされます。どのように考えたらよいのか、タケとササの種類を知って一緒に考えてみましょう。



Part 2

日本と東南アジアの「竹文化」

広田勲 岐阜大学

日本のみならず、アジアでタケは昔から様々な利用されてきました。例えばタケノコは食用としてそのまま調理されることもあれば発酵を経て漬物にもなります。東南アジアの一部地域では「酢」の原料にもなります。また成長したタケは様々な日用品や道具の材料として使われ、用途ごとに多様な種類のタケが使われています。また竹文化を考えると、環境との関係も重要です。タケは攪乱された環境、すなわち、人里離れた手つかずの自然よりも人の影響を受けた環境を好む植物です。アジアにおけるこうした環境や農業との関係についてもお話ししたいと思います。今回の講習会では、日本と東南アジアの事例を中心に竹文化の多様な側面を紹介します。

